学ぶ意欲を高め、思考力・判断力・表現力を育む授業づくり

～ 新聞活用による対話的活動の充実を通して ～

南魚沼市立中之島小学校

１　ＮＩＥ実践のねらい

（1）主題設定の理由

当校の実態として、児童自己評価においては、「自分の考えをしっかり書く、進んで話す」ことに対する肯定的評価の割合は高いが、職員によるその評価が低いという傾向があげられる。

この相反する結果は、例えば「教師の問いに対する単発的な回答」等の言わば「低次」の活動内容であっても、児童自身が「よくできた」として、肯定的に評価しているためであると考えられる。

視点を変えれば、教師が日常的に展開する授業内容が、児童の中の自己評価の基準を低いものにしてしまっていた結果とも言える。そしてそれは、子どもたちが自ら課題を発見し、思考を深め、判断し、適切な表現について考える活動や、仲間との学習の練り上げの中で学びの意欲を高める活動を十分な時間確保の下に実践できていないことが大きな要因であるという結論に至った。

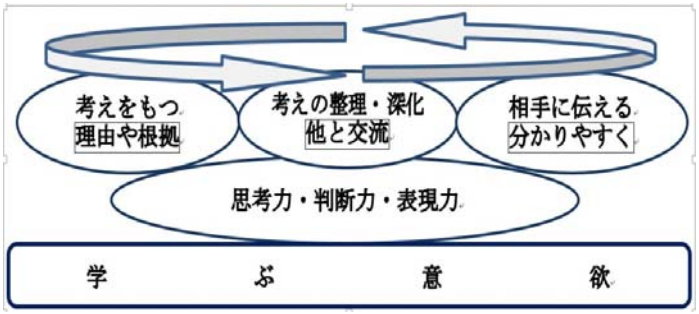
また、学習指導要領には、情報活用能力を高めるために新聞を含む多様な資料を活用していくことが明記された。更に全国学力・学習状況調査の結果から、新聞閲読習慣及び社会的事象に対する関心の高さと正答率の相関関係が認められており、新聞の活用が学力にも好影響を及ぼす可能性が高いと考えられる。

以上のことから、ＮＩＥをツールに据えた思考力・判断力・表現力を育む単元・授業構想を研究していくことにした。

(2) 目指す学びの姿

① 理由や根拠を明確に意識して自分の考えをもつ。
② 他者と交流しながら、自分の考えを整理し、深めていく。
③ 自分の考えや学んだことを、相手に分かりやすく伝えようとする。

①～③は、低次→高次という階層的な構造を成して、段階的に行われるということではないく、それぞれの活動が相互に関連し、往還することによって学びが深まる、いわば「スパイラル構造」であると考える。



２　本年度実践の概要

（1）授業研究

①　新聞活用の工夫

２年次に当たる今年度は新聞活用の場面として、単元のどこで、また、45 分の授業のどの場面でどのような教師の意図をもって活用していくのかを意識して実践をしていくこととした。またそれは単元の指導目標達成のために必要な活用であることを意識し、新聞活用のための単元にならないよう留意した。

【単元の中での位置づけ】

	新聞活用場面	教師の意図
1単元	序盤	見通しをもたせる。意欲をもたせる。
	中盤	学びを広げる。深める。比較・検討する。
	終盤	学びを広げる。深める。学んだことを生かす。 発展的課題。

【４５分の授業の中での位置づけ】

	新聞活用場面		教師の意図
授業1単位時間	導入	①学習課題としての新聞提示	新たな事象に出合わせる。
	展開１	②問い(◎)を作る教材や資料としての新聞	考える視点をもつ。 比較・検討する。
	展開２	③問いを解決するための見通しや自分の考えをもつための新聞	問いの共有
	終末	④問いの解決場面での新聞	「わかった、できた」をより実感させる。

②　対話的活動の工夫

授業の中に対話的活動を確実に意識づけるため、県立教育センターが作成した「主体的・対話的で深い学び実践ハンドブック」に示されているピクトグラムを用いて単元デザインを行った。19 のピクトグラムの中から特に右に示した「相手に分かるように説明する」ことを重点的な学びの姿とし、単元の中に必ず位置づけることとした。

相手に分かるように説明する

（2）新聞に親しむ環境づくり

①　図書室のコーナー

図書館司書が、『新聞と図書のコラボ！』として、コーナーを作った。新聞記事と関連のある本を「おすすめの一冊」として、紹介し、子どもたちは、新聞と図書の両方に親しむことができた。

また、新しい新聞の他、過去の新聞も見られるようにしており、お気に入りの連載記事を読みに来る子どももいた。

② NIE コーナー

毎朝、届けられた朝刊を５日分ほど教務室前廊下に並べて展示した。また、南魚沼市の地元紙や当校の子どもの活動が掲載された記事を掲示し、様々な新聞や記事に親しむことができた。

職員も新聞を手に取りやすく、授業作りや NIE タイム準備に新聞をめくる姿が多く見られた。

朝日小学生新聞

毎日小学生新聞

新潟日報・日本経済新聞・産経新聞・読売新聞

③ 階段の踊り場コーナー

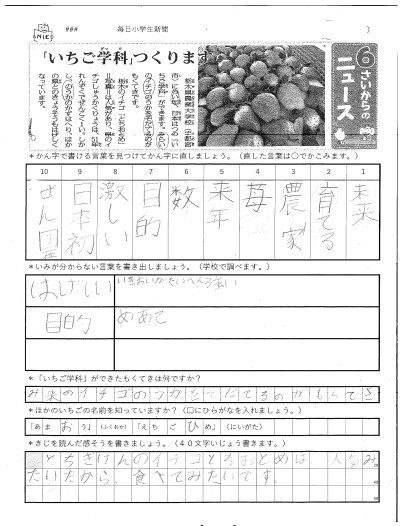
朝日小学生新聞には、毎月末に実物大の写真が掲載される。実物大で表せるということも新聞の利点である。

子どもたちの興味を引くめずらしい犬やアイスクリームなどのスイーツ、恐竜の化石などが紹介されており、児童は毎月楽しみにしていた。

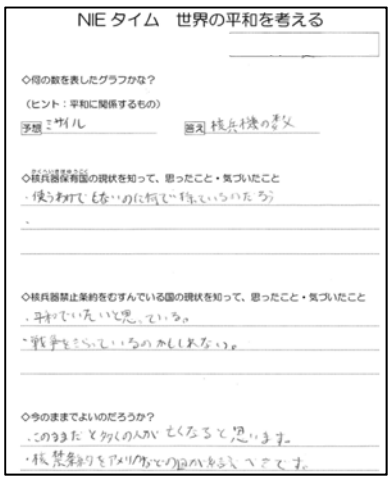
④ NIE タイム

毎週火曜日の朝活動の 15 分間を NIE タイムとし、全学級で新聞に親しむ時間とした。

担任が読ませたいと選んだ記事の他、新聞社発行のワークシートを活用し、皆で記事を読み合い、言葉について学んだり、時事に関する事柄について意見交換を行ったりした。



3 年生



5 年生

自分と友達のとらえ方に違いがあることに気づき、自分の考えをもつことの習慣化が図れた。

３　授業実践例

６年社会

「世界を取り巻くコロナウィルスと人類の宿題」（世界の中の日本）

（1）単元で目指す児童の姿

・社会的事象について多面的に物事を考える姿。

・地球規模の課題を解決することの意識が芽生え、世界の協力の重要性に気づく姿。

・課題解決を進めるには自分自身の行動にも意味があることに気づき、自分にできることや社会が取り組むべき課題について判断し表現する姿。

（２）コロナウィルスを学習材にする意義と新聞活用の利点

・自分の生活と結びつけて考えることができる。

・ＮＩＥタイムを活用し、社会的事象への関心を高めるとともに、日々情報を収集させることができる。

・経済とコロナ禍、経済と大気汚染、など複数の視点で考えさせることができる。

・明確な答えがない中で、自分で判断し、考える対話的活動ができる。

（３）指導の実際

①　導入

インドの２枚の同じ場所の写真（2019.11、2020.6）を比較する。

2019.11

暗い。空気が濁っている。排気ガスがたくさん出ている。

2020.　6

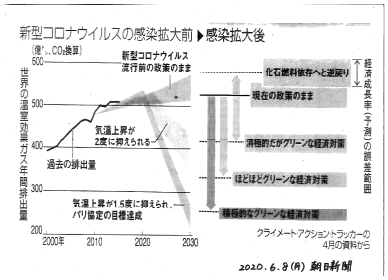
空気がきれい。建物がよく見える。人や車が少ない。

この間に起こったことといえばコロナウィルスの流行だ！

ロックダウンがあったね。
工場がストップしたり、飛行機が飛ばなくなったりした。

②　展開１

今の生活（コロナ禍）が続くとどうなるだろう？



【良いこと】
・CO２がなくなる。
・排気ガスが減って環境がよくなる。
・海洋ごみが減る。

【困ること】
・経済が回らなくなる。
・会社などが赤字になってしまう。
・外出が制限されてしまう。
・人が活動しないから、収入が得られない。

コロナウィルスが流行しない世界のままだったら、CO2はどんどん増え続けるよ。
2020.6.８付け朝日新聞
「CO２削減今を契機に」

経済を守るの？環境を守るの？どっちを守りたい？

⇒どっちも守っていきたい！！

③　展開２

環境も経済も守るためにはどうしたらよいか考える。

【環境を守る】
・電気自動車にする
・木を切らない。
・木を植える。
・バイオプラスチックを使う。

【経済を守る】
・クラウドファンディングを活用し、資金を集める。
・通信販売を活用していく。

まず経済を優先し、経済がよくなったから、環境に力を入れて行くとか？

今までにどんな資料があったかな。

自分たちにできそうなことは？

・電気を消す。
・ごみの分別をする。
・プラスチックのストローを紙ストローに代える。
・まだ使えるものは捨てない。
・近いところは歩いていく。
・マイバックを持つ。
・必要な分だけ作って、最後まで使う。

④　終末

思考したことを価値づける新聞記事を読む。

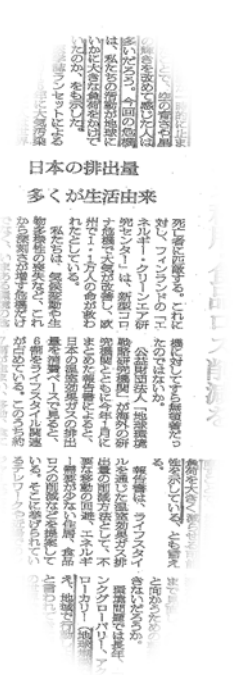
【まとめ】

一人ひとりが地球全体を考えて身近なところから行動する。

【児童の振り返り】

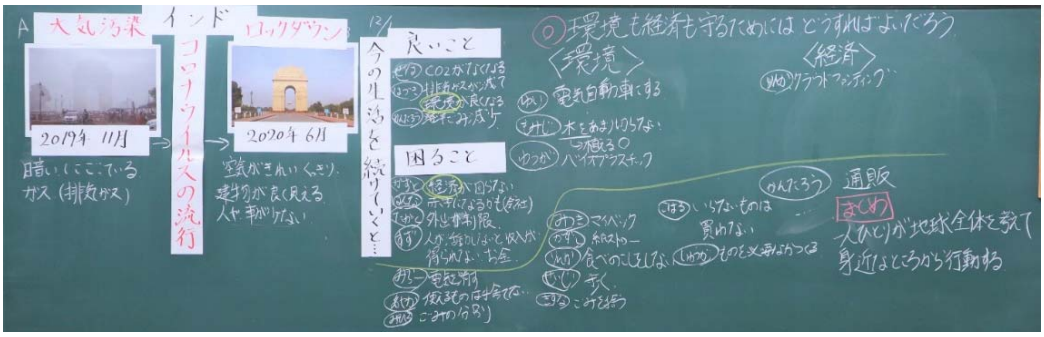
ゲーム機やお菓子、文房具を買って、自分にも経済を回すことができる。コロナ禍で困ったことが多かったけど、空気がきれいになったことも分かった。これからも環境と経済を勉強したい。

【要旨】世界規模の感染症の流行は、私たちの活動が地球に大きな負荷をかけてきたことを示した。私たちが生活のあり方を見直すことで地球環境への負荷を減らせる可能性がある。環境問題は「地球規模で考え、地域で行動」と言われており、コロナ後の世界では、私たち一人一人に実践が求められている。


日本の排出量
多くが生活由来

2020.6.8 付け朝日新聞
「CO２削減今を契機に」

（４）最終板書

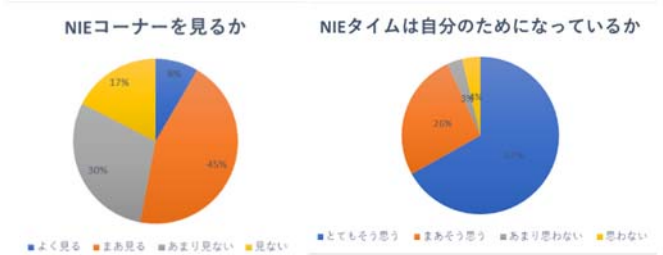


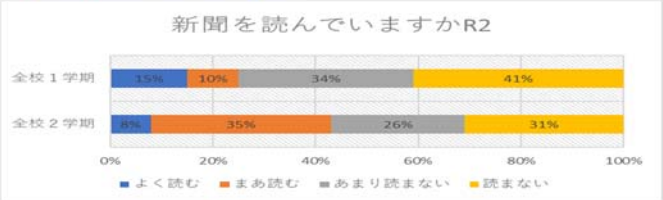
（５）実践を終えて

学習の前に、子どもたちに世の中の関心事についてアンケートをしたところ、「コロナウィルス感染症」が圧倒的に多かった。今を生きる子どもたちの興味関心に応える情報として、新聞記事がとても有効だった。また世界中が悩みあぐねていることについて考えさせることは、子どもたちの思考を活性化させた。この単元学習中に学級の子どもたちの発言力は増し、子どもたち同士の対話を生んだ。また、「地球規模で考え、地域で行動する」という新聞記事の文言は、「国際協力について学ぶ単元を自分事として考えさせたい。」という教師の願いを後押しした。新聞は、大人にも子どもにも自分と社会とのつながりを考え、自分の考えを構築させてくれるメディアであることを改めて認識した。

5　成果と課題

（1）児童の実態より





１年次よりも２年次の方が新聞を読むと答える児童が増え、更に２年次でも、１学期より２学期に「まあ読む」と答えた児童が大幅に増え、半数に届く児童が新聞を読むと答えるに至った。

また、ＮＩＥコーナーを見ると回答した児童は約半数にとどまっているが、ＮＩＥの有用性については９７％の児童が自分のためになっていると回答している。これは掲示するなどの環境面を整えるだけでは不十分であるが、実際に新聞の記事に触れる時間を確保するとほとんどの児童が新聞の良さを実感できることを表している。

（2）授業における新聞活用

新聞というメディアの強みは「適時性」と「信用性」であると考える。今まさに社会で問題となっている事象、それを裏付ける写真やグラフなどの資料が新聞にあふれている。これらの良さを生かした授業を考えるとき、「社会科」という教科に行き着いた。教科を特に限定せずに実践に取り組んだが、今年度は１～３年生が国語科、４～６年生が社会科と奇しくも分かれた。社会科の単元は、４年生の「水」、５年生の「水産業」、６年生の「国際協力」である。これらの学習に新聞を活用することで、自分たちの「社会問題」として学習に取り組んでいくことができた。教科書の写真や資料が遠いどこかの絵空事となってしまいがちであるところに「身近な事実」としての新聞資料は、自分事として考える契機となり、自分の考えの確認や友達との対話の材料になり得た。こうした社会科での有効活用の前段として、下学年の国語科の授業が存在したのではないかと考える。新聞に親しみ、興味をもつとともに、国語科の言語事項を学び、また、学んだことを新聞に発展させる授業実践がなされた。子どもたちは、自分が見たり聞いたりしていることが、新聞に出ている、という新鮮な驚きをもって学習に取り組む姿が見られた。

新聞活用の授業の困難さとして、「自分の力で読むこと」「授業にマッチする記事探し」があげられる。読ませたい記事があったとしても特に一般紙であると「記事を読む・解説する時間」が必要となってくる。また、当然授業用に書かれたものではないため、記事の内容を理解するためには様々な背景をも理解していなければならず、予定授業時数をオーバーしてしまうことは否定できない。

2年間の取組で、新聞活用の良さを実感することができた。今年度で指定校研究は終わることとなるが、新聞活用の良さを生かし、これからは新聞活用の日常化を目指していきたい。　　（廣瀬　理恵）